国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成29年9月1日発行　第41巻第9号通巻第480号

みんぱくは開館40周年を迎えます

月刊みんぱく

2017 9月号

特集

多様なカナダ先住民文化

カナダ先住民社会の変貌　岸上伸啓／リスのチーフと松ぼっくり　山口未花子
勇敢さと柔軟性　立川陽仁／イヌイット村落再訪　岸上伸啓

複雑な誕生祝い

あん・まくどなるど

プロフィール
カナダ、モントリオール生まれ。1982年に初来日。環境政策、環境歴史学専門。宮城大学の国際センター勤務、国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットの初代所長等を経て、現在は上智大学大学院教授。著書は『日本の農漁村とわたし』（清水弘文堂書房）など多数。

今年建国一五〇年を迎えるカナダ。重みのある《誕生祝い》になりそうだ。カナダの歴史は、喜びと悲しみ、誇りと恥、栄光と挫折が表裏一体となって紡がれてきた。過去の光には必ず暗闇があったといっても過言ではない。

カナダは、市民権のない亡命者に新たな故郷を与えつづけてきた。わたしの祖先は政治不安に包まれたウクライナを逃げ出し、イギリスの領土拡大の勢いが強まる中、カナディアンプレーリーの開拓地で第二の人生を歩むことができた。そのおかげで、わたしのようなヨーロッパ系白人は広々とした平原地帯でのびのび育てられた。

しかし、これは多くの《国内亡命者》を生み出すことになる。それまで自由に生きてきた先住民を不毛の土地に追いやり、いわゆる保護地区に定住させた。この動きは一六世紀頃からじわじわと始まり、二〇世紀半ばまでに、東西南北、カナダのいたるところでそれまでに保っていた人間と自然界との動的な関係に大きな罅（ひび）が入ってしまった。自然界と「縁を切る」ということは文化の破壊も伴い、それは取り返しのつかない損失のように思う。

複雑な気持ちで祝う誕生日ではあるが、未来への希望がないわけではない。「和睦（reconciliation）」は、先住民をめぐる苦い過去を見直す動きである。特にトルドー政権になってから、この問題にオープンかつ真剣に取り組もうとする姿勢が伺える。

過去に戻って修正することは不可能。また、過去の罪にこだわり続けるのも不毛なことだと、不信感に満ちた対立から意識の共有へ、かつての緊張に多少の緩みが見えてきている二〇一七年のカナダ。そのきっかけとなったのは人間が定めたいかなるボーダーにも縛られない環境問題であった。

北極圏からの訴えがカナダの国土に響き渡り、その余韻が国の南部にも残る。イヌイットが昔から暮らすカナダの極北地帯では、温暖化現象がもっとも速いスピードで、もっとも高い頻度で起こっている。季節外れの現象が増えれば、祖先から受けつがれてきた長老の教えが嘘になってしまう日が来るかもしれないという危機感を、声を揃（そろ）えて訴え、伝統知と科学知を統合した気候対策と生物多様性保全策の必然性を呼びかけている。

東へ西へ、南へ北へ、開拓の歴史によってつくられたカナダ。今度は先住民が持つ伝統知を科学知と同等に扱うべきだというカナダ政府の考えから、伝統知を「インディジェナス・サイエンス（indigenous science、先住民の視点に立つ科学）」と称し、西から東へ、南から北へ今年の春から来年にかけて州ごとに先住民のコミュニティ代表たちと科学者と行政が一堂に会するワークショップを開くことにしている。双方の知の根底にあるものの見方を参考にし、それらを融合した上で今までになかった環境政策を作り出し、カナダの開拓の歴史に新たな一ページを刻もうとしている。

今年の春、海氷の融解時期が記録を破った。未来に向けてキラキラと輝き始めたカナダは、過去の影と未来への不安をその柔らかい光で包み消せるのだろうか。

月刊 みんぱく

9月号目次

1 エッセイ　千字文
複雑な誕生祝い
あん・まくどなるど

特集　多様なカナダ先住民文化

2 カナダ先住民社会の変貌
岸上 伸啓

4 リスのチーフと松ぼっくり
——動物との交渉に見るカスカの今日的展開
山口 未花子

6 勇敢さと柔軟性
——クワクワカワクゥの法への抵抗と資本主義への参入
立川 陽仁

8 イヌイット村落再訪
岸上 伸啓

10 ○○してみました世界のフィールド
本場インドでのヨーガ修行
竹村 嘉晃

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
風変わりな姿をしたイッカクとユニコーン
池谷 和信

16 新世紀ミュージアム
戦争記念館
新免 光比呂

18 手芸考
残余にあらわれる
ネパールの手芸的なるもの
南 真木人

20 ながなんぢゃ
出席番号は大事？——インドの名付け事情
菅野 美佐子

21 次号予告・編集後記

特集

多様なカナダ先住民文化

今年、開館四〇周年を迎える当館。特別展に引き続き、九月には企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」を、満を持して開催する。本特集をとおしてカナダ先住民の現在にふれ、ぜひその多様性、魅力を感じてほしい。

会期　二〇一七年九月七日［木］―十二月五日［火］

カナダ北西海岸先住民のトーテムポールの建立（2006年）

カナダ先住民社会の変貌

岸上伸啓（きしがみ のぶひろ）　民博 学術資源研究開発センター

広大な国土と雄大な自然を有するカナダは、二〇一七年に建国一五〇周年を迎えた。同国はイギリスやフランスなどのさまざまな地域からやって来た多様な移民から構成されているため、一九八八年に多文化主義法を制定し、国是とした。しかし、現代のカナダ社会を理解するうえで、忘れてならないのは、数千年前から生活を営んできた先住民の存在である。企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」では多様な先住民文化とその持続力をカナダ政府による先住民政策と関連させながら紹介する。

カナダ先住民とは

カナダ先住民とは、ヨーロッパ人が北アメリカに頻繁に到来し始める一六世紀以前から、現在のカナダの地に住んできた人びとをさす。一九八二年憲法によって、彼らはファースト・ネーションズ、メティス（メイティ）、イヌイットであると規定されている。二〇一一年時の人口は、それぞれ約八五万人、約四五万人、約六万人で、その総計はカナダ全体の約四パーセントに相当する。メティスはヨーロッパ人の毛皮交易者と先住民女性とのあいだに生まれた人びとの子孫で、おもに中西部の大平原地域に住み、独自の文化を保持している。イヌイットは極北地域に住み、イヌイット語（エスキモー語）を母語とする人びとである。ファースト・ネーションズはそれら以外の多様な先住民である。

カナダの自然環境は、極北地域、亜極北地域、北西海岸地域、大平原地域、東部森林地域に大別できる。極寒の極北地域ではアザラシや野生トナカイ、魚類をとる狩猟・漁労文化、針葉樹林が生い茂る亜極北地域ではヘラジカや野生トナカイなどをとる狩猟文化、温暖多雨の北西海岸地域ではサケやアザラシをとる漁労・海獣狩猟文化、大平原地域では野牛（バッファロー）をとる狩猟文化、東部森林地域ではマメ、カボチャ、トウモロコシを耕作する農耕文化が形成された。

ヨーロッパ人との接触と苦難

一六世紀以降、カナダ先住民社会は時間差や地域差はあるものの、ヨーロッパ人とビーバーやラッコ、ホッキョクギツネ、アザラシなどの動物の毛皮を交易するようになった。当初、先住民とヨーロッパ人との接触は散発的であり、交易は相互に利益をもたらし、伝統的な文化の活性化が見られた。しかし、ヨーロッパからの入植者が増えるにしたがい、農耕や牧畜、漁業に適した土地は入植者によって占拠されるようになった。また、ヨーロッパ伝来の天然痘やはしかなどの伝染病が蔓延（まんえん）し、先住民人口は激減し、キリスト教の宣教活動によってキリスト教への改宗も見られた。

一八六七年に英領北アメリカ法によって複数の植民地が統合され、オンタリオ州やノヴァスコシア州など四州からなるカナダが建国される。と、同政府は先住民と土地譲渡条約を結び、先住民をリザーブ（保留地）に押し込め、文化的同化や国民化を推進した。一九世紀後半から二〇世紀半ばにかけては、北西海岸先住民による結婚式や葬式での贈与儀礼であるポトラッチなどの伝統的儀礼の実施やトーテムポールの制作を法律で禁止したこともあった。このため先住民社会では伝統文化の継承が困難になるとともに、経済的にも苦難の時期を迎えた。

政治的自律化と文化変化

第二次世界大戦が終わると政府はカナダ全土での主権の確立や天然資源開発を推し進めたが、土地譲渡条約に署名していない各地の先住民から同意を得るために土地権について話し合う必要が生まれた。一九六〇年代、アメリカ合衆国での黒人の公民権運動やネイティブ・アメリカン（アメリカ先住民）の権利獲得運動の影響を受け、カナダ先住民も政治運動を開始した。その結果、一九七〇年代半ば以降、イヌイットをはじめとする複数の先住民集団は土地権と補償金を獲得するとともに、ある程度、自分たちの生き方を自らの手で決定することができるようになった。このような動きと連動して、各地の先住民は、アイデンティティの核となる伝統文化を創造的に継承しつつ、イヌイットの石製彫刻や版画のようなあらたな文化を生み出すようになった。

一九八〇年代以降は、就職や進学、社会問題から逃れたりするために、ふるさとやリザーブを離れ、カナダ南部に移住する先住民も激増し、都市においてハイブリッドな先住民文化を生み出しつつある。

カナダ東部森林地域先住民マラシートの文化教育キャンプ（1996年）

カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州キャンベルリバーで2017年8月に開催されたトライバル・ジャーニーに参加した北西海岸先住民のカヌーのひとつ

リスのチーフと松ぼっくり
——動物との交渉に見るカスカの今日的展開

山口（やまぐち） 未花子（みかこ）　岐阜大学助教

はじめてカナダを訪れたとき、飛行機の窓から見ても果てしなく広がる森林と地平線に息をのんだ。このカナダの北方に広がる針葉樹林帯に古くから住みついた先住民集団のひとつに、北アサバスカ諸族のカスカの人びとがいる。現在のカスカは賃金労働をし、学校で教育を受け、定住している。しかし彼、彼女らと生活をともにしていると、ふとした瞬間に狩猟採集民としての顔がのぞくことがある。

松ぼっくりひろい

例えばある年の夏から秋にかけて、カスカの村ではジャックパインの松ぼっくりを集めるアルバイトが流行していた。聞けば日本の企業が、カナダ北西のユーコン準州の森林を伐採する跡地に植える木を育てるために松ぼっくりを麻袋ひとつ五〇ドルで買ってくれるという。そこでカスカの人びとが松ぼっくりを手に入れるためにとった手法は、「盗む」というものだった。ただしそれは人からではなく、リスが冬越しのために蓄えた松ぼっくりを巣穴から、である。地中の巣穴は意外と大きく一度に数十個とれることもあり、人びとはいたるところで地面を掘り返していた。その光景を見ながら今年の冬、リスは大丈夫かと心配になったのを覚えている。

リスのチーフと天候

リスたちにとってさらに悪いことに、その年の冬は厳しい天候が続いた。ユーコンでもめずらしいマイナス五九度という寒さや、何日にもわたる吹雪に見舞われ数日間家から出られないこともざらだった。一緒に暮らす古老は「なにかおかしい」と考えた挙句、「みんなが松ぼっくりをリスから盗んだからだ」ということに思い当たった。古老がまだ小さかったころ、リスの罠（わな）をしかけたらたくさんリスがかかっていてその中に一匹だけ白いリスがいたことがあり、それを見た古老の母は「これでおしまい」と言って慌てて家に入ってお祈りをはじめたという。獲ってはいけないリスのチーフがかかってしまったからだ。そしてリスのチーフは仕返しに天候を悪化させることがあるのだと教えてくれたという。因みにチーフというのは群れのリーダーのことである。古老曰（いわ）く、本当は松ぼっくりをとったら代わりにドッグフードやピーナッツバターを置いてこなくてはいけないのに、若者はそれを知らないからやっていなかったのだろう。それでたくさんリスが死んだ、それに怒ったチーフが、天候を悪化させているに違いない、というのである。

変化を生き抜く力

自然や人的な環境は常に変化し続けるものである。それにしてもカスカの人びとが経験したこの一〇〇年の変化は大きかっただろう。第二次世界大戦の最中に道路が建設されるまで、この地にはまだ移動しながら森のなかで暮らす狩猟採集文化が根づいていた。しかし古老たちは、社会の変化や気候の変動を鋭い目で観察しながら自分たちなりのやり方で生き延びてきた。それを支えてきたのは、少しでも「なにかおかしい」と思ったときにしばらく考えてリスのチーフに思い至った古老の思考に見られるような注意深い自然へのまなざしと、どのような状況にあっても臨機応変に対応する狩猟民の生存力だったのではないだろうか。

森を見下ろせる丘の上でくつろぐ古老（2013年）

右　：ジャックパインの木を切り倒して松ぼっくりをとろうとする古老（2006年）
左上：松ぼっくりを食べるリス（2013年）
左下：リスが巣穴に蓄えていた松ぼっくり（2006年）

勇敢さと柔軟性

――クワクワカワクゥの法への抵抗と資本主義への参入

立川陽仁（たちかわ あきひと）　三重大学教授

トーテムポールの制作現場（2009年）

北米先住民のなかでもカナダの太平洋沿岸に暮らす人びとは、「北西海岸」の先住民とよばれ、トーテムポールを制作し、いわゆる冠婚葬祭を司るためのポトラッチという蕩尽（とうじん）で有名な式典をおこなうことで知られている。この北西海岸の先住民のひとつで、バンクーバー島の北東部を主たる生活圏としてきたのがクワクワカワクゥだ。

今、彼らの生活圏に足を運べば、トーテムポールはもちろんだが、運がよければポトラッチでさえ見ることができる。これら伝統的な文化遺産が今なお息づいているという事実は、われわれ日本人からすればそうめずらしくないかもしれないが、彼ら先住民にとっては困難な道のりだった。

「禁止法」との戦い

まず、ポトラッチをはじめ、それにかかわる慣習（トーテムポールの制作も含む）は、先住民に白人文化を身につけさせようとするカナダ政府により一八八五年から一九五一年までカナダの法で禁止されていた。つまりそこには約七〇年のブランクがあることになるのだが、じつはクワクワカワクゥは、勇敢にもこの法に抵抗し、多数の逮捕者を出しながらも一九二〇年代まで続けたのである。逮捕という犠牲はしかし、後に彼らクワクワカワクゥが「禁止法」撤廃以後の文化復興の旗印になることで報われた。現に一九五三年、「禁止法」解禁後初の合法的なポトラッチを開催したのはクワクワカワクゥのマンゴ・マーティンだったし、彼はさらに、自分のトーテムポール制作技術を他の北西海岸先住民たちに伝授する役回りも果たした。

右上：ポトラッチで人喰（く）い鳥のダンスを踊るジミー・シウィド氏（2009年）
右下：客に与えられる前に一度並べられるポトラッチの贈り物
（2009年、藤木杏奈撮影）
左　：まき網によるサケ漁の風景（2006年）

競争社会を生きる

しかし今の世のなか、巨大権力に抵抗するだけではポトラッチやトーテムポールなどの伝統を継承させることはできない。資本主義が渦巻くなか、伝統を維持するためにはやはりお金が必要なのだ。とりわけ蕩尽で知られるポトラッチなどは、今開催しようと思えば最低（日本円にして）一〇〇〇万円の出資が求められる。資本主義の席巻（せっけん）するなか、北米の各地で先住民が職につけず、貧困化していったのは周知の事実である。では、その苦境のなかで、クワクワカワクゥは金のかかるポトラッチをいかに維持できたのか。

その答えを簡単にいえば、クワクワカワクゥは資本主義下の競争でけっして「白人」に負けなかったのだ。つまり彼らは、先住民としては例外的な「勝ち組」だった。自身の生活圏に、資本主義が近代的なサケ漁業という形で入ってきたのは一九世紀末のことである。彼らはこの産業に積極的に参入し、大量のサケをとり、さらには水揚げして得たお金を貯蓄し、漁船や網の購入費用として投資した。ときに訪れた技術的な困難も、チーフを中心とした従来の家父長的な集団労働を少しばかり修正することで乗り越えた。漁業とのこうしたかかわりのなかで、多くのクワクワカワクゥが経済的に自立するにいたったが、チーフなど一部の人たちは文字どおり大金もちになった。彼らこそがポトラッチのために一〇〇〇万円用意した人物であり、伝統文化を今の世に残した立役者になったのだ。

このサケ漁業も、サケの減少のため一九九〇年代には衰退する。これはクワクワカワクゥにとっても大打撃だった。しかし彼らは今なおサケの養殖や海上輸送業などあらたな事業の展開を積極的に模索しているのである。

イヌイット村落再訪

岸上伸啓（きしがみ のぶひろ）　民博 学術資源研究開発センター

わたしは、二〇一六年晩秋、約一〇年ぶりにハドソン湾北東岸にあるアクリヴィク村を訪問した。イヌイット文化を調査するために、一九八四年から二〇〇四年にかけて毎年訪問した村である。飛行機から降りた瞬間に極北特有の冷気が体を包み込み、北の大地は変わっていないことを実感した。その一方で、一〇年一昔というが、村の変化には目をみはるものがあった。

整備されるインフラ

アクリヴィク村はモントリオールから北西方向一八五〇キロメートルのところに位置する。かつて小型プロペラ機で村に入るまでには中継地で一泊を余儀なくされていたが、近年、モントリオールから隣村までジェット機が就航し、朝に出ると午後三時過ぎには村に到着できるようになった。さらに、かつては電話が村外との唯一の通信手段であったが、今ではインターネットの普及により、村人はパソコンやスマートフォンで電子メールやフェイスブック、そしてラインまでも使っている。村と外の世界の距離が確実に縮まった。

かつて荒れた運動場のようであった滑走路は整備され、空港の建物やなかの待合室も立派になっていた。街の古い住宅は撤去され、その代わりにあらたな住宅が建てられ、海側から内陸部に向かって宅地が拡大していた。さらに村はずれにあった小さな発電施設は、丘の上に屹立（きつりつ）する大型発電所へと姿を変え、その背後には巨大な石油備蓄タンクが新設されていた。

わたしが下宿したのは旧友の新居だった。わたしの自宅よりもはるかに広く、きれいで、設備も充実しており、生活環境の変貌に驚いた。その住宅には温水の出るバス設備、水洗トイレ、セントラルヒーティング、洗濯・乾燥機、電気コンロ・オーブン、電子レンジ、冷蔵庫が完備されている。このほかテレビやオーディオ機器、パソコン、ベッドなどもあった。

生活の変化と悲しい現実

一〇年前は村人の多くが狩猟の方を重んじ、行きたいときに出猟していた。しかし、現在はますます賃金労働につくことを望むようになっていた。就職すると自由に狩猟に行けなくなるが、家賃を払ったり、食料品を購入したりするためには現金が不可欠なのである。

老人や無職の人以外は、狩猟に行くのは、週末や仕事の後、休暇中のみに限られ、地元でとったものよりも店舗で購入した食料品を食べることが多くなった。しかし、以前と比べ狩猟に出かける頻度は減ったとはいえ、村人はハンターから獲物を分配してもらえるため、地元でとれる動物の肉を食べ続けているのも事実だ。

以前にまして飲酒や麻薬が深刻な問題となっていた。また、今年の六月に一九歳の若者が村人を殺傷し、警官に射殺されるというショッキングな事件が起こった。このような事件は例外としても、酒や麻薬に関係した大小さまざまな事件が頻発している。このため村を去り、モントリオールなどに移り住む人の数も増えつつある。

ケベック州政府の政策で村は近代化し、生活が楽になった一方、イヌイットの顔からは笑みが少なくなったように感じる。現在のイヌイット社会には光と影が混在している。

右上：仕事後に狩りに出かける若者たち
（以下写真はすべてケベック州ヌナヴィク地域にて、2016年撮影）
右中：モントリオールとヌナヴィク地域の拠点を結ぶジェット機
右下：週に二度カナダ南部から空輸される生協の生鮮食品
左上：村役場で仕事をする男性
左下：調理する男性

○○してみました世界のフィールド

本場インドでのヨーガ修行

竹村（たけむら） 嘉晃（よしあき）
南アジア地域研究国立民族学博物館拠点 拠点研究員

近年、日本でも習い事として人気のあるヨーガ。フィールドワーク中に気分転換のつもりで習い始めたものの、今ではわたしの生活の一部になっている。本場インドでのヨーガ体験を書き綴（つづ）ってみたい。

頭立ちのアーサナをおこなっている筆者（タミルナードゥ州マドゥライ、二〇〇六年）

南インドのケーララ州北部でヒンドゥー教徒が信仰する神霊祭祀（さいし）の調査をおこなっていたとき、わたしは祭儀を担う人の家に居候していた。部屋を一室与えられたものの扉はなく、子どもたちが四六時中出入りし、夜には同世代の息子とベッドを半分共有する日々を過ごしていた。フィールドワークの実感があって楽しかったが、月日が経つにつれ次第に家族と離れた時間と空間が欲しくなった。そこで気分転換に何かしてみようと思いたち、以前から興味のあったヨーガを習ってみることにした。ちなみに、日本ではローマ字表記と同様に「ヨガ」と表記されることが一般的だが、インドでは「ヨーガ」と発音する場合が多いことから、ここでは「ヨーガ」としるす。

地方のヨーガ教室

インドで初めて通ったヨーガ教室は、居候先からバスで二五分ほどのところにあり、伝統医療のアーユルヴェーダが受けられる病院併設の施設でおこなわれていた。先生はアーユルヴェーダの医師でもある六十代の痩身な男性で、コースは週二回九〇分のレッスンが七カ月間続き、費用は七〇〇ルピー（二〇〇五年時で約一八〇〇円）と格安だった。クラスは男女にわかれ、男性クラスは小学生から八十代までのおよそ四〇人からなり、外国人はわたしだけだった。当時は世界的なヨーガ・ブームが顕現したころで、インドでは都市部の中間層のあいだで健康意識の高まりとともにヨーガが再評価されはじめており、外国人観光客のなかには「本場インドのヨーガ」を習いに来る者が見られ、リゾート観光地ではにわかごしらえのヨーガ・クラスが人気を集めていた。わたしが通った教室はそれらとかけ離れたものであり、天井につるされた扇風機が生ぬるい風を送る部屋で、上半身裸に短パン姿の男たちが床に敷いたベットシーツの上でアーサナ（ポーズ）やプラナーヤーマ（呼吸法）をおこなっていた。彼らの多くは心臓病や糖尿病、腰痛などを患っており、治療の一環として教室に通って来ていた。

プラナーヤーマの実践をする受講者たち（ケーララ州カンヌール、2005年）

アーシュラムでのヨーガ指導者養成コース

コース終了後、先生や受講者仲間からアーシュラム（道場）に行くことを勧められた。隣のタミルナードゥ州のマドゥライにあるシヴァナンダ・ヨーガ・アーシュラムでヨーガ指導者養成コースがおこなわれることを知り、フィールドを離れて参加することにした。アーシュラムでは一カ月間共同生活をしながら、ヨーガ指導者になるために必要なさまざまな事を学んでいく。受講者の多くは西欧諸国から来ていたが、そのなかにはインド系欧米人も複数いた。費用は外国人の場合二五〇米ドル（二〇〇六年時で約三万五〇〇〇円）を寄付という形で支払い、コース終了時の試験に合格するとインド政府認定およびアメリカ・ヨーガ連盟公認のヨーガ指導者資格が授与される。

アーシュラムでの生活はインド的規範が強いられる。受講者は「学ぶ者」をあらわす黄色のTシャツと白の綿パンツのユニフォーム着用が義務づけられ、女性は常に肩などの露出を控えるよう指示される。欧米文化の特徴ともいえるあいさつのキスやハグは秩序を乱すという理由で禁じられ、酒・タバコ・ドラッグは御法度である。食事は南インド式の菜食料理が毎日二回、おかわり自由（とにかくおいしい！）のためダイエット効果は期待できなかった。一日のスケジュールは、五時に起床してから瞑想（めいそう）と講話にはじまり、アーサナとプラナーヤーマの実践、昼食を挟んで清掃などの奉仕作業、ヴェーダ哲学、解剖学、指導法の授業が続く。夕方の空き時間に自主練習をおこない、夕食後には再び瞑想と講話、最後にヒンドゥー神の賛歌を歌うキールタンをおこなって二〇時消灯となる。許可なき外出は認められず、当時はインターネットへのアクセスはもちろんのことテレビもなかった。まさにヨーガ漬けの毎日である。

多くの受講者が厳格な規律に不平をこぼしていたが、授業が進むにつれて指導者になることを意識するようになり、真剣度も高まっていく。また受講者のあいだでは別の流派のアーサナや他のアーシュラムの情報なども共有される。インド的規範のもとで教授される「伝統的」なヨーガは、受講者個人によって取捨選択されながら「本場インド」という正統性とともに受容され、各国にもち帰られるのである。

二〇二五年、インド政府の働きかけのもと、国連が「ヨガの国際デー」を認定した。日本ではヨーガのグローバルな広がりを称える声ばかりが聞かれるが、その過程にはインド政府の政治的な思惑が見え隠れしている。一方、ヨーガ指導者・インストラクター養成コースが世界中で濫立し、日本でも女性のキャリアのひとつとなっている。こうした近年のグローバルなヨーガの隆盛は、もはや健康やフィットネスの文脈だけでは収まらない文化社会的事象といえる。気分転換にはじめてから十数年、今ではヨーガがわたしの日課であり、研究対象にもなっている。

インド ★

上：アーサナの実践クラス
下：アーシュラムで出される南インド式菜食料理（タミルナードゥ州マドゥライ、2006年）

みんぱく Information

開館40周年記念特別展
「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」
シーボルトが、終焉の地ミュンヘンに残したコレクションをとおし、民族学博物館の父とも呼べるシーボルトの日本博物館が150年ぶりによみがえります。
会期　10月10日(火)まで
会場　特別展示館

■関連イベント
展示場クイズ「みんぱくQ」
特別展編
期間　特別展会期中

開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展
「カナダ先住民の文化の力
――過去、現在、未来」
カナダは2017年に建国150周年を迎えました。同国と先住民との関係の変化に着目しながら、多様な先住民文化の歴史と現状、未来を紹介します。
会期　9月7日(木)～12月5日(火)
会場　本館企画展示場

■関連イベント
ワークショップ
10月1日(日)
「カナダ北西海岸先住民のワタリガラスの仮面を作ろう」
10月22日(日)
「カナダ先住民イヌイットのステンシル版画を作ろう」
時間　各日13時～15時30分(12時30分受付開始)
講師　田主誠(版画家)、岸上伸啓(本館 教授)
会場　本館第5セミナー室、本館企画展示場
※要事前申込(先着順／各日定員20名)、参加費500円、要展示観覧券

ギャラリートーク
日時　企画展開催期間中の月曜・木曜14時～
会場　本館企画展示場
※申込不要、要展示観覧券
※都合により時間帯が変更になる場合があります。

開館40周年記念新着資料展示
「標（しめぎ）交紀（ゆきとし）の珈琲（コーヒー）の世界」
伝説の自家焙煎珈琲店「もか」の店主、標交紀が集めたコーヒー関連資料をもとに、中東から日本へ伝わり、独自に磨かれた「珈琲」の世界を紹介します。
会期　9月28日(木)～11月14日(火)
会場　本館ナビひろば

■関連イベント
ワークショップ「標交紀の珈琲とは？」
講師　門脇祐希
（自家焙煎珈琲専門店「コフィア」店主）
黒田賢治
（本館現代中東地域研究拠点 拠点研究員）
菅瀬晶子(本館 准教授)
①鼎談
日時　10月9日(月・祝)13時～13時45分
会場　本館第5セミナー室
※申込不要(先着順／定員80名)、要展示観覧券
②試飲
日時　10月9日(月・祝)10時15分～、14時～、15時～(全3回／各回50分)
会場　本館職員食堂
※要事前申込(応募者多数の場合は抽選／各回定員15名)、参加費300円、要展示観覧券
※申込締切9月20日(水)必着

エジプト映画「ヤギのアリーとイブラヒム」上映会
作品上映と、シェリーフ・エル＝ベンダーリー監督とのトークをとおして、2011年の「アラブの春」以降を生きるエジプトの若者の現在について考えます。
日時　9月9日(土)13時30分～16時20分（13時開場）
会場　本館講堂(定員450名)
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布

みんぱく映画会
第37回ワールドシネマ
「おみおくりの作法」
孤独死を遂げた人を、できる限りの誠意を尽くして〝おみおくり〟する仕事に臨んできた民生係のジョンの姿をとおして、さまざまな人生を歩んできた人びとの尊厳ある生と死について考えます。
日時　9月18日(月・祝)13時30分～16時（13時開場）
会場　本館講堂(定員450名)
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布

みんぱく映画会　台湾映画鑑賞会
「祝宴！シェフ」
台湾の食文化をユーモラスに描く台湾映画から、食と社会との関係について考えます。
日時　10月14日(土)13時30分～16時30分（13時開場）
会場　本館講堂(定員450名)
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布

台湾文化光点計画連続講座
「台湾の飲食文化」
9月16日(土)
「阿宗麺線を食べたことがありますか？
――台湾鰹節の歴史」
時間　10時30分～12時(10時15分開場)
講師　林淑美(関西学院大学)
会場　本館第5セミナー室(定員80名)
※申込不要、参加無料、先着順

みんぱくフェア開催
今年で開館40周年を迎える本館の紹介やミニ展示、楽器の体験など、各種企画を実施します。
会期　9月1日(金)～9月30日(土)
会場　エキスポシティ内のインフォレストすいた

カレッジシアター
「地球探究紀行」
開館40周年にちなみ、本館展示の地域区分(12地域)ごとに、地球に暮らす人びとの多様な営みを紹介します。
時間　13時～14時30分
会場　あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費1000円、定員各回50名
主催　産経新聞社
共催　近鉄文化サロン、スペース9
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団
9月13日(水)
南アジアの人びとの移動を言語に見る
講師　吉岡乾(本館 助教)
9月27日(水)
インドの日常茶飯――食事と娯楽
講師　三尾稔(本館 准教授)
お申し込み・お問い合わせ先
ウェーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial

お問い合わせ(本館 広報係)
電話　06-6878-8560／FAX　06-6875-0401

みんぱくゼミナール
日時　9月16日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場　本館講堂
定員　450名(当日先着順)
参加費　無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)

第472回
多文化主義の国カナダにおける先住民文化
講師　岸上伸啓（本館 教授）
さまざまな民族が共生するカナダは、2017年に建国150周年を迎えました。先住民と国家の歴史は、対立と妥協の繰り返しでした。同国の多様な先住民文化の歴史と現状を国家との関係に着目しながら紹介します。

ハイダのトーテムポールの建立

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。
9月3日(日)14時30分～15時　西アジア展示場
アラビアコーヒーにみるアラブ世界のおもてなし文化
話者　西尾哲夫(本館 教授)
9月10日(日)14時30分～15時　南アジア展示場
南アジア展示「生態となりわい」の見どころ
話者　南真木人(本館 准教授)
9月17日(日)14時30分～15時15分　企画展示場
カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来
話者　岸上伸啓(本館 教授)
9月24日(日)14時30分～15時15分
日本の文化展示場、朝鮮半島の文化展示場、中国地域の文化展示場、中央・北アジア展示場
アジアの婚礼――祝福のかたち
話者　韓敏(本館 教授)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

●無料観覧日のお知らせ
9月16日(土)は、本館展示と企画展を無料で観覧いただけます。**ただし、本年度より特別展の観覧は有料となりますので、ご注意ください。**

●みんぱく無料シャトルバスのご案内
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通無料送迎バスを特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」の会期中に運行します。
運行日　10月10日(火)までの土曜・日曜・祝日
　1日11往復、所要時間10分、無料
運休日　平日
※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。
※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介
■吉岡 乾 著、西 淑 イラスト
『なくなりそうな世界のことば』
創元社　1,600円(税別)

世界の50の少数言語の中から、各言語の研究者たちが思い思いの視点で選んだ「そのことばらしい」単語に文と絵を添えて紹介した、世にも珍しい少数言語の単語帳。耳慣れないことばの数々から、「小さな」言葉を話す人々の暮らしに思いを馳せてみてください。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く） FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　本館第5セミナー室(定員96名)
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円
第471回　10月7日(土)13時30分～14時40分
【企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」関連】
カナダ先住民と建国一五〇年――北西海岸先住民を事例に
講師　岸上伸啓(本館 教授)
建国一五〇年を迎える、多文化主義の国カナダ。この一五〇年は、先住民にとって、国家との政治的な対立と妥協を繰り返した時代でした。伝統的な生活から切り離されようとするなかで、先住民は一貫してそれらの継承や復興に努め、固有の権利を主張し続けてきました。一方で、先住民が欧米人と毛皮交易を行った結果、伝統的儀礼が大規模化したという例もあります。カナダ先住民の一五〇年を、北西海岸先住民の事例に照らして紹介します。
※講演会終了後に展示見学会をおこないます(40分)。

第76回体験セミナー
世界の嗜好品、コーヒーを知る(仮)
開催日　10月18日(水)
会場　UCCコーヒー博物館、UCC上島珈琲株式会社本社(神戸市)

国立民族学博物館開館・友の会発足40周年記念
「みんぱく大集合」
■記念対談
「文化人類学と霊長類学
――人類文化の普遍性をさぐる」
吉田憲司(本館 館長)
山極壽一(京都大学総長)
開催日時　11月4日(土)13時30分～15時（13時受付開始）
会場　本館講堂
※要展示観覧券(一般420円)、会員無料(会員証提示)
※要事前申込(定員450名／応募者多数の場合は抽選)
【申込締切　10月20日(金)】
主催　千里文化財団
共催　国立民族学博物館

想像界の生物相

風変わりな姿をした イッカクとユニコーン

民博 人類文明誌研究部　池谷（いけや） 和信（かずのぶ）

資料名｜イッカククジラの牙
標本番号｜H0278376
地域｜北極圏
サイズ｜長さ 181㎝×直径 2.5 ～ 4㎝

資料名｜『ドン・ファン・デ・アウストリアの動物誌』
資料 ID｜F112002561（ファクシミリ版）
出版年｜原本は 1570 年ごろ制作
地域｜スペイン
サイズ｜縦 24.9㎝×横 19.5㎝（画像は一部を掲載）

◆◆◆ イッカクという生き物 ◆◆◆

民博本館の中央・北アジア展示には、イッカク（一角）の牙を展示している（右頁参照）。その長さはおよそ二メートルにおよびまっすぐに伸びており、先端のとがったドリルのようなものだ。この牙は、イッカクの雄のみがもち、歯が変形したものであるというが、いかにも角のようにも見える。牙を展示した意図は、ロシアの極北の民がかつてはイッカクの肉を利用してきたが、漢方薬の材料として牙の商品価値が高まり乱獲された事実を紹介することにある。

イッカクの形を模したおみやげ品

さて、イッカクはクジラの仲間である。夏のあいだは北極海の海岸近くを回遊するが、冬になると海の凍結が始まるので、海岸から離れた海域に移動する。イッカクの食料はタラなどの魚であり、イッカク自体はホッキョクグマなどに捕食される。七月初めに、わたしは、パリの国立自然史博物館にてイッカクの展示を見る機会があった。数頭のイッカクが、北極の海で群れをつくり気持ちよさそうに泳いでいる映像を見た。地元のハンターは、ノコギリのような細長い一本の牙が奇妙に見えるので、イッカクをすぐに見つけていた。売店では、イッカクの形をしたおみやげ品が売られていた。

◆◆◆ 牙と角との共通点 ◆◆◆

一方で、紀元前以来、ヨーロッパの人びとはユニコーンとよばれる奇妙な動物がいると信じ、右頁の写真のような中世の動物誌では、実在の動物と並んで登場した。その後、イッカクの存在が知られると、ユニコーンとよばれた伝説上の動物の角としてイッカクの牙がもたらされた。ユニコーンは、まっすぐで非常に長い一本の角が額に生えている馬のような姿を示す生き物である。尻尾をもち四つ足で歩き、口の下のひげはヤギのそれにも類似している。その生き物は、きわめて獰猛（どうもう）であり飼いならすことはできず、長い角を武器にしてゾウを倒すこともできるというのだ。角には蛇などの毒で汚された水を清める解毒作用があるとされた。獰猛とされながら、娘のふところに抱かれる場合にはおとなしくなるといい、その場面は中世から近世にかけて絵画やタペストリーの題材とされてきた。

大航海時代以降、ヨーロッパ人たちが北の海にも進出すると、ユニコーンの角と形が類似していたイッカクの牙が注目された。それにもまた解毒作用があるとみなされ、多数の牙が売買目的で乱獲されることになった。江戸時代に、日本ではオランダ商人をとおしてイッカクの牙がもたらされ、「ウニコウル」とよばれ、貴重な薬として流通した。一七一三年に刊行された百科事典である『和漢三才図会』には、イッカクが紹介されている。このように、ユニコーンは紀元前から知られた想像上の生き物ではあるが、ユニコーンとイッカクの牙にあらたなつながりが生まれたことによってイッカクの頭数が減少したという事実を忘れないでおきたい。

新世紀ミュージアム

戦争記念館
전쟁기념관 ／韓国

新免（しんめん） 光比呂（みつひろ） 民博 超域フィールド科学研究部

世界に数多く存在する戦争関連の博物館、記念館、資料館。これらはその国・地域の歴史、戦争をさまざまな立場の人びとの視線をとおして展示しているといえるだろう。韓国の博物館から世界の軍事博物館を考える。

戦争記念館外の兵士像（掲載写真はすべて2016年に撮影）

ソウルの戦争記念館を訪れた。わたしが調査地とするバルカンには、繰り返された戦争の歴史を映し出す軍事博物館が各地に存在する。そのひとつであるセルビアの軍事博物館では、NATO（北大西洋条約機構）による空爆の展示にショックを受けた記憶がある。というのも、ユーゴ内戦、コソヴォ紛争ではメディアを通じて一方的に残虐非道の悪玉にされたセルビアもまた被害者であることが実感されたからだった。

韓国にもまた数多くの戦争の歴史がある。それらのなかには、我が国も隣邦として深くかかわったものがある。秀吉の朝鮮出兵から明治国家による韓国併合は日本が直接の当事者であったし、また第二次世界大戦後の朝鮮戦争（六・二五事変）は日本の経済復興のきっかけとなった。さらに日本ではベトナム特需ともいわれたベトナム戦争にも、韓国は若者を送った。こうした歴史をもつ韓国で、戦争と歴史はどのようにとらえられ、展示されているのかを紹介しつつ、軍事博物館について考えてみたい。

戦争記念館の展示

屋外展示場には朝鮮戦争当時、韓国側の国軍将校の兄と北朝鮮側の兵士である弟が劇的に再会したという実話をもとにつくられた兄弟像や、朝鮮戦争休戦五〇周年の記念造形物、高句麗の長寿王（ちょうじゅおう）が、父親である広開土太王（こうかいどたいおう）の業績を称えるために建てたとされる広開土太王陵碑、その他には第二次世界大戦や朝鮮戦争、そしてベトナム戦争などで使われた戦車や飛行機、潜水艦などがおかれている。

入口となっている二階から入ると、目につくのが民族精神や太極旗などを描いた天井の大きな絵である。入口の右側には空中展示室、入口をまっすぐ行くと「護国の星」室がある。空中展示室では、一九四八年に米軍から受けとった韓国空軍創設期の航空機L－5連絡機やヘリコプターなどが展示されている。「護国の星」室では静かで独特な雰囲気につつまれ、戦争により命を落とした兵士が星になり大韓民国を守護すると表現されている。

一階には戦争歴史室があり、旧石器時代に使用された武器や、先史時代、三国時代、高麗時代、朝鮮時代、大韓帝国時代から今までの戦いと武器の歴史が展示されている。朝鮮時代のコーナーでは韓国北西部の水原（スウォン）にある世界遺産、華城（ファソン）を縮小再現した模型もある。

三階では、おもに朝鮮戦争時代やベトナム戦争のことがテーマになっている。海外派兵室は、韓国の海外派兵の歴史展示室である。統一新羅時代からベトナム戦争、またクウェート、東ティモール、アフガニスタンなど国際平和維持に関係した派兵に関する紹介もある。ベトナム戦争に関する展示がいちばん多く、年表やベトコン（南ベトナム解放民族戦線）の地下洞窟の模型展示、兵士の数などに関する統計資料の検索画面などが設置されている。

韓国戦争室Ⅱでは、北韓（北朝鮮）軍の南侵背景から戦争の経過および停戦協定までの過程を展示している。こちらでは朝鮮戦争で戦死した韓国軍と国連参戦国将兵たちの認識票を素材に巨大な涙を作り上げた「涙の滴」を展示したり、朝鮮戦争当時の避難生活などをそのまま再現したりしている。

軍事博物館と戦争

世界の軍事博物館で多く展示されるのは、当該民族や国家の歴史における重要な戦争の背景や経過とその意義、代表的な兵器・技術の発達史、戦争犠牲者の遺品、戦争の時代を映し出す日常生活の道具などである。そうした軍事博物館というのは、建前からいうと戦争を振り返りながら平和を祈る場所なのであろうが、実際のところは戦い争い続ける人類史の暗黒面についての展示である。ほとんどすべての戦争は、それぞれの立場からすると自衛のための戦争であり、正義の感情に基づいている。それゆえに、ほとんどすべての軍事博物館は自国のおこなった戦争の正義を語る場所となっている。

戦争記念館前景

戦争について語ることは難しいが、イラクで殺害されたフリーフォトジャーナリスト橋田信介氏の著作『イラクの中心で、バカとさけぶ』は示唆に富んでいる。それによると、われわれは戦場と戦争の違いを自覚するべきなのだという。人は戦場に反対するのは簡単だが、戦争に反対するには政治の自覚が必要なのだ。

民族浄化、集団レイプ、虐殺がある悲惨な戦場に賛同する人は、復讐（ふくしゅう）を誓う当事者以外にはない。だが戦争のレベルになると意見は分かれてしまい、戦争に賛成する意見が多くあらわれる。幾多の戦争を経験した近代西欧諸国は、この戦場の悲惨さに敏感となり、戦場にさまざまなルールを設定することで戦争を許容可能なものにしてきた。その結果、原子爆弾に引き起こされた惨事よりも、ルールを破った真珠湾の方が悪質であるという意見すら生まれる。つまり、戦場と戦争を区別することで、人は良心の痛みを自らがかかわる政治から引き離すことができるのだ。戦場には反対するが、戦争は不可避なものと考える。

これがまさに「戦争」を展示する軍事博物館が存在する理由のひとつである。これに対して、「戦場」を展示したのが広島、長崎の原爆資料館であろう。軍事博物館が大義を掲げる国家や政府、民族など上からの目線とすると、後者は理由もなく殺される、さまざまな小さき人びとの下からの目線といえる。

残余にあらわれる ネパールの手芸的なるもの

南真木人（みなみ まきと）
民博 グローバル現象研究部

ネパールにおける「手芸」とは何か。行政や各種団体の働きかけで変化しうる、農民やカースト由来の職人たちのもの作りを見ていると、手芸の領域とその可能性が浮かび上がってくる。

第11回手工芸品貿易フェアにおけるダカ洋服（Sabah Nepal）のファッション・ショー（2013年）

安価な工業製品が出回り手作りの機会が減ってきたとはいえ、日本に比べネパールでは今日もなお生活や生業に欠かせない実用品が農民によって作られている。得手不得手はあるにしろ農家の女性は、稲藁（いねわら）の筵（むしろ）織り、トウモロコシの葉の座布団や籠編み、ジュートの背負い紐（ひも）編み、木綿太糸の肩掛けバッグ編みなど、生活する術（すべ）としての技工的なもの作りをこなす。

他方、カースト社会のネパールでは、一部のもの作りの仕事がカーストの伝統的な職業として排他的に父子相伝されてきた。それは金銀、銅・銅合金、鉄などの鍛冶業、皮革業、仕立業、太鼓（木地）作り、土器作り、儀礼用の絵・仮面作りなどの職人的なもの作りだ。昨今は、伝統的なカースト職業を継がない若者も多く、逆に他のカーストに属する人の参入も見られ、カーストに基づく分業はやや崩れてきている。ここではカースト社会におけるさまざまな技工的な仕事の成り立ちと布置をたどり、手芸的なるものについて考えたい。

官が勧めた家内工業

本連載で金谷は（二〇一六年一二月号）、インドにおける「ハンディクラフト」は行政用語であり、開発の一部として勧められてきたと指摘する。インドと国境を接しその影響を受けてきたネパールでは、ハンディクラフトの代わりに「家内工業（ネパール語でガレル・ウドーグ、英語でコテージ・インダストリ）」とよび、行政が産業の育成に力を入れてきた。一九三九年には家内工業局が設置され、先ず手織り綿布の生産拡大のため、綿花の栽培や織機の改良とその普及が図られた。後に手漉（す）き紙、竹細工、羊毛製品などにも広がったが、対象者はプロジェクト地域の女性とカトマンドゥ中央刑務所の受刑者であった。数多い実用品作りのなかでプロジェクトにより商品性が見出されたごく一部のものは、家内工業と名付けられ、外国人が好むデザインや色調などへと改良が加えられてきたのだ。

一九八〇年代に始まった女性のための家内工業プロジェクトでは、英国の支援によりダカ織り（幾何学模様の綿織物）のデザインが刷新され、現在では代表的な土産物のひとつとなったダカ・ショールに結実した。つまり、行政が梃（てこ）入れした家内工業のなかの上手くいった分野を、わたしたちはネパールの伝統と受けとめ、その製品を享受しているといえる。

民が主導する手工芸産業

他方、伝統的なカースト職業として職人的なもの作りをしてきた人びとは、自らの仕事を「手工芸（ネパール語でハスタカラー、英語でハンディクラフト）産業」と名付け、それを我が国の伝統、美術や文化を反映した産品を作る、ないしは労働集約的な特別な技能、地元の素材や資源を用いる産業と位置付けた。一九七一年にはネパール手工芸協会を設立し、こちらは官というより「民」主導で産業の発展、特に輸出の促進が図られてきた。協会の発足や運営を担ってきたのは、ネワール人の高カーストであるサキャ（伝統的なカースト職業は金細工）であり、手工芸品輸出額に占める割合が高いのは金属、パシュミナ（カシミヤの一種）、フェルト、羊毛、手漉き紙などの製品である。協会は数年おきに手工芸品貿易フェアを主催し、二〇一四年の第一二回同フェアでは南アジア諸国連合の手工芸品展示会も兼ね、ネパール外から数多くの団体が参加した。

インドでは優れた職人に対し国家が報奨する制度があり、職人から日本でいうところの伝統工芸士へと社会的な地位が転換するが、ネパールにはそのような制度がない。そのため、絵師などの職人のなかには、ネパール美術協会が主催する全国美術展の「伝統」部門に作品（製品と分かち難いが）を出展し入賞を目指す人もいる。美術のなかに工芸も含まれていることで、手工芸の工芸化の可能性が開かれている。もっとも国王を会長としてきた同協会の美術展は、王制廃止に至る政治混乱で二〇〇四年の第三五回を最後に開催されていない。

町の女性が作った、手芸的な壁掛け飾り（既製品の箕（み）に毛糸でクロス・ステッチ刺しゅう）とビニール紐編みバッグ（1990年代）

手芸的なるもの

ネパールにおける技工的なもの作りは、担い手の違いにより、生活に根差した農民によるものとカースト由来の職人によるものに分けられる。農民による実用品作り（非商品）は、選ばれると家内工業（商品）につらなる潜在性をもち、カースト由来の職人による手工芸（商品）は、作家性をもつ工芸（非商品）へと変わりうる。それらの転換点には、プロジェクトや美術展といった近代的装置が深くかかわり、連続している「もの」に境界線が引かれる。

ネパールにおける手芸的なるものは、これらのいずれにも入らない残余のなかに認められそうだ。それは、非農民の女性が必ずしも生活に必要とはいえない非実用品を非経済的に作る領域である。具体的には、農地や家畜をもたず、生活する術としての技工的なもの作りが減じた、都市や町の女性が作る非商品になる。町の女性のなかには、訓練で身につけたミシンを用いた女性用の服作り（「シライ・カタイ」とよばれ、直訳は「縫・裁」）に携わる人が少なくないが、それは仕立業というカースト職業への参入であり手芸ではない。手芸的なるものは、「非何々」と否定形でしかあらわせない収まりづらさをもつ。だが、見方を変えればそれは、手芸が領域を越えて発展しうる秘めた可能性だとも考えられる。

出席番号は大事？ ――インドの名付け事情

What's in a name?

菅野 美佐子（かんの みさこ）
南アジア地域研究
国立民族学博物館拠点
拠点研究員

日本の学校の出席番号は、地域によっても異なるが、苗字のあいうえお順か誕生日順が多いようだ。わたしの小学校では出席番号は誕生日の順に決められていた。わたしはたいてい四～八番くらいで、どちらかというと早い番号だった。一番や二番の生徒は、先生の質問に最初に答えさせられるし、身体測定や体力測定、休みあけの課題発表など何かと最初になることが多い。わたしもすぐに順番が回ってくる方で、ほかの生徒の解答を十分に聞いたり、やり方を見ることができないので、どうしようかと緊張しながら順番を待ったものだ。しかし、出席番号が遅いと、最後まで緊張しなければならなかったり、用意していた解答を先に答えられてしまったりするそうで、それはそれで不満なようである。

学校の出席番号は、他の国でも関心事となるようだ。となりの中国では、子どもの出席番号が中国で不吉とされる一四番になった親が、インターネットのグループチャットで教師を厳しく非難して物議を醸した。

近年教育が白熱するインドでも、親にとって子どもの出席番号は気になるもののようである。インドでは出席番号は、ギヴンネームのアルファベット順というのが主流だが、最近都市部の方では、アルファベットのAから始まる名前の児童が教室に溢（あふ）れているらしい。子どもの出席番号が早ければ、前の席に座れて先生の話をよく聞けるし、発言の確率も高くなるので、成績がよくなると信じる親は少なくない。インドでもっとも話者人口が多いヒンディー語では母音は「あ」「い」「う」と短く発音するものと「あー」「いー」「うー」と伸ばすものがあり、「あー」をアルファベットで表記するとAAとなる。「アーラブ（男児名）」や「アーヤナ（女児名）」などAAから始まる名前を付ければ、わが子の名を出席簿の上位にもってくることができるというわけだ。

もちろん出席番号だけが名付けの理由ではない。Aから始まる名前は最近のインドの占星術界では縁起がよいと考えられている。またインドの週刊誌『インディア・トゥデイ』によると、ボリウッドの人気俳優シャー・ルーク・カーンが息子にAから始まる名前を付けたこともブームの火付け役になったという。一昔前までは、占星術師に誕生日からもっともよい頭文字を割り出してもらい、助言にしたがって名前を決めていた。また、親や祖父母の名前を引き継いだり、無数に存在するヒンドゥー神の名を付けるのが一般的だった。今では、新生児の名付けを請け負うオンラインサービスが、占星術的に縁起がよく、親の希望に合った意味や頭文字の名前を提供してくれる。最近の傾向としては、Aから始まる名前に加え、ヒンドゥー教やサンスクリットの伝統を感じるエキゾチックな響きをもちながら、外国人にも発音しやすい短い名前が多いという。急速な経済成長とグローバル化のなかで、インド的なる要素を保持しつつ国際的にも受け入れられる、そういう名前が人気なようである。

月刊みんぱく 2017 9月号

編集後記

本号は、間もなく開催される開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」関連として企画した。150年前といえば、1867年のことだ。年表と地図を見るとカナダの西隣アラスカが南に接するアメリカ領となり、日本では大政奉還がおこなわれ、翌1868年が明治元年にあたる。日本から離れたカナダの地では何が起きていたのであろうか。展示では、先住民の世界として一枚岩的な印象を抱きかねないカナダの先住民文化について、地域的特性にまで踏み込んだ紹介がされるという。カナダの先住民文化のこれまでとこれからに関する本館の展示を楽しみにしていただきたい。（丹羽典生）

●表紙：拡大する住宅地
（カナダ、ケベック州ヌナヴィク地域アクリヴィク村にて。2016年11月）
撮影：岸上伸啓

次号の予告

特集

デジタル化するフィールドワーク（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい人のために――会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

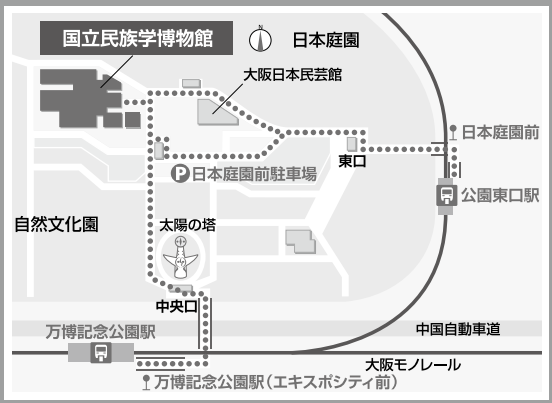
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00～17：00）

月刊みんぱく 2017年9月号
第41巻第9号通巻第480号　2017年9月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　丹羽典生（編集長）　寺村裕史　三島禎子
南真木人　山中由里子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
https://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
https://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology